

園番号 702

令和7年度 奈良市立都祁こども園 研究実践概要

園長名 尾北 亜紀
全園児数 59名

1. 研究主題 「心と体を動かし、主体的に活動する子どもをめざして」
～身近な環境や人と関わる中での保育の工夫～

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

子ども達は明るくて友達にも優しく素直であるが、初めての活動には不安を感じ挑戦することにためらう姿や、自分の友達と同じことをすることに安心感を得て自分らしさを表現できない様子も見られる。そこで、身近な人や環境と関わる中で、自分の思いや考えを表情・仕草・態度・言動など様々な方法でその子らしく伸びやかに表現し、主体的に活動するための保育の工夫について探っていきたいと考え研究主題に選定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

・身近な環境や人と関わる中で、主体的に自ら活動する子どもをめざす中で、身近な人や環境との関わりに焦点をあて、各年齢の発達段階に応じた保育内容の工夫について考える。

②研究の重点

・研究主題について職員間で共通理解を図るとともに、園内研修では各年齢の実践から子ども理解を深め保育内容の工夫に努める。
・友達や保育者、異年齢児との関わりや、小学生、地域の方々など、身近な人や環境と交流する機会をもち、心が動かされる体験がもてるような保育内容の充実を図る。

③活動の方法

・実践事例を通して身近な環境や人と関わる中での主体的な姿を捉え、各年齢に応じた保育内容の工夫について検討する。

子どもの主体的な姿

身近な環境や人との関わり

保育の工夫

【0歳児】 11月 下旬 「お山のぼりたいな」

興味や関心のある場所や遊びがあると視線を向けたり、近くまで行き様子を見たりするようになったA児。築山登りもその一つで、初めは保育者と一緒に手を繋いで登り下りすることを繰り返し楽しんでいった。ある日も築山の近くまで行き「したいな」とばかりに保育者の顔を見ていたので、「A君、登ってみる？」と声をかけるとしばらくじっと考えた後、一人で登りに行った。しかし2.3歩進んだあと困った表情になり保育者の顔を見たので「大丈夫、先生見ているよ。登れそう！」と声をかけると再び一人で登ろうとした。三分の一程登ると下りて来て尻もちをついたが笑いながらこちらを見て満足そうに手を叩いていた。



《考察》

保育者はA児と一緒に繰り返し楽しんでいった築山登りで、本児の気持ちを察し理解した上で、寄り添って声を掛け、そばで見守っていた。気持ちをくみ取り言葉で返しながらか寄り添うことで「自分のことをわかってくれている」という安心感につながったり、「見てくれているから大丈夫」という安心できる身近な大人が近くにいることで、「行ってみよう」、「やってみよう」とする気持ちにつながったりする。

また、園児の笑う、泣く、甘えるなどありのままを受け止め一対一でゆったりと関わることを大切にしてきたことで、次第に表情やしぐさ、指差し、目線で保育者に思いを伝えるようになっていった。様々なもの、こと、人に触れたり試したりする意欲が育っていくように、引き続きゆったりと丁寧に関わり見守っていききたい。

【1歳児】 12月 上旬 「食べていいよ」

ままごと遊びが好きなB児は、ままごとコーナーの机にご馳走を乗せた皿を並べて保育者に振舞ってくれていた。そこへC児が来て、保育者が食べている様子を見ていた。C児はB児がつくったご馳走を指でさしたり、「先生、食べてるやん」と言ったりして興味を示していた。しかしB児はC児に触ってほしくないようで、「Bちゃんしてるからだめよー」と怒っているような様子だったため、C児はそばで見ているだけであった。保育者が「Cちゃんもおいしそうだなって見ているのかな」「いい匂いしてきたのかな」などとC児の思いを代弁してB児に伝えた。するとB児は少し考えているような表情をしてからニコッと笑って「食べていいよ」「一緒しよう」とB児自らC児に声を掛けた。それを聞いたC児は嬉しそうな表情で「いただきまーす!」と言い、「はいどうぞ」「あーん」「おいしーい」などとやり取りしながら2人で一緒にご馳走を食べていた。



《考察》

B児とC児の言葉になっていない思いや気持ちを表情や態度から読み取り、相手に伝えたことで、互いの思いを知ることができ、2人のやりとりにつながった。友達に興味をもち、「同じことをしたい」「一緒にしたい」という思いが少しずつ芽生えてきている時期ではあるが、トラブルになることも多い。友達と一緒に過ごすことを楽しいと感じてほしいと思い、保育者が仲立ちとなって友達の姿や思い、関わり方などを丁寧に知らせることを大切にしてきた。お互いの思いを大切にしながら仲立ちをしていくことで、子ども同士で簡単なやり取りをしたり、一緒に遊ぼうとしたりする姿に繋がってきている。今後も一人一人の思いを丁寧に受け止めながらタイミングを見て子ども同士の関わりを繋ぎ、「友達と一緒に過ごすことが楽しい」と感じられるような関わりや環境を工夫していきたい。

【2歳児】 1月 中旬 「ここで靴脱いで」

D児とE児が遊具の上で帽子と靴を脱いでいる。そこにF児も加わり、D、E児の様子を見て同じように靴を脱いで並べた。保育者は、「帽子を被ってね」「靴を履いてね」と声をかけそうになったが、様子を見守っていると、3人が「ここはトイレ」「おしっこしよう」と、複合遊具を家に見立てて遊んでいるようだったので、保育者が複合遊具の下から「ピンポン」とインターホンを押す真似をした。すると、D児が「はい、先生、こっち来て」「先生、ここで靴脱いで」「ここはトイレ」「アイス買ってくるから待っててね」と自分なりのイメージをもって保育者に伝えていた。そして、D児は保育者が脱いだ靴を自分の靴の横に向きを揃えて並べた。そこへ、G児も来て、友達の様子を見ると、自分で靴を脱ぎ友達の靴の横に同じように向きを揃えて並べた。すると、次はH児が「何してるの?」と近くに来て聞くが、D児達には聞こえていなかったようで、返答はなかった。しかし、H児は友達の様子を見てそこが家だと分かったようで、「ぼくもー」と笑顔になり、同じように靴を並べた。順番に子どもが増え、あっという間に狭くなった家で、子ども達は顔を見合わせ、「フフフッ」と笑い合っていた。



《考察》

この時期の子どもは、D児のように、家の中では靴を脱ぐといった生活経験が遊びに表れ、自分なりのイメージをもって遊ぶ姿が多く見られるようになってくる。初め保育者は、D児達がなぜ複合遊具の上で帽子と靴を脱いでいるのか分からず、「帽子を被ってね」「靴を履いてね」と声をかけようとしたが、子ども達がしている事には何か意味があると思い、子ども達のやりとりを聞き見守ったことで、家に見立てて遊んでいることに気付くことができた。

そして、保育者が子どもの思いや行動に共感し、同じイメージをもって遊ぶことで、子ども達の遊びの広がりや、友達のしていることに自ら興味をもち同じイメージで遊ぶ姿も見られた。今後も、子どもの行動の背景を理解し、子どもが感じていることやしようとしていることを見守ったり、共感したりすることで子どもの主体的な姿を引き出していきたい。

【3歳児】 6月 「先生、これ使いたい」

ゆらゆら橋や平均台、巧技台、ミニハードルなどの運動遊具を日によって組み合わせ方を変えて、保育者や友達と一緒に体をたくさん動かし、サーキット遊びを楽しんでいる。始めは保育者が運動遊具を並べてつくったサーキットコースで保育者に手を持ってもらったり、できるところは自分で進んだりしながら、楽しんでいた子ども達であった。しかし、繰り返す内に次第に「先生、これ使いたい」「ここに置いてもいい？」と、自分で運動遊具を置きコースを考えたいという思いが出てきた。



そこで、「どれが使いたい？」「どこに置いてみる？」と子ども達に聞きながら、一緒に運動遊具を置いてみた。サーキットができると、「できた！」と嬉しそうな表情を見せ、繰り返し楽しむ子ども達。数日後には、保育者と一緒に用具を置くだけでなく、友達と「ここに置こう」「こっちも空いてるよ」と一緒に用具を並べ、遊ぶ姿も見られるようになってきた。

《考察》

乳児クラスの頃から慣れ親しんだ遊具を目に付く所に置いておくことで、興味をもてるように環境を整えた。また、保育者も一緒に遊びながら、子ども達のやってみたいという思いを受け止め、どうしたいか聞きながら進めてきたことで、繰り返し遊びを楽しむ姿が見られるようになった。保育者が子どもの思いを受け止め、子どもの姿に合わせて関わることで、繰り返し楽しんで遊んだり、友達と一緒に用意しようとしたりと、意欲的に環境や人と関わろうとする姿へつながっている。今後も子ども達がやってみたいと思えるような保育や環境を工夫し、楽しみ遊ぶ中で意欲的に活動する子ども達を育てていきたい。

【4歳児】 11月 初旬 「お姉ちゃんみたいに跳びたい」

園庭では縄を地面に置いてジャンプしたり、片手で縄を回したりし、少しずつ縄に親しんでいる。5歳児も少し離れた所で縄跳びをする姿が見られ、互いの様子を感じながらそれぞれの場所で楽しんでいた。



初めてのする活動や遊びに不安さがあり、保育者に誘われて遊び出すことが多いI児だが、5歳児の姿を見て縄跳びに興味をもってやってみようとする姿が見られた。繰り返し挑戦するが、縄に引っかかってしまうことが多いI児であった。5歳児が「縄跳び一緒にしよう」とI児のそばに来てくれ、前跳びをして見せた。「すごいな、お姉ちゃんみたいに跳びたい」と目を輝かせて見つめ、5歳児の真似をしながら縄を回すI児だが、脚に当たったり絡まったりしてうまくいかないことが続いた。「あーあ、まただめだ」と少し諦めそうな姿が見られ始めた時、5歳児が「(腕を広げて)こんなふうに回したら何回も跳べるよ」「走りながら縄を回すと跳びやすいかも」と跳び方のコツを伝えてくれた。「やってみる」と再び縄を回し始めたI児。5歳児や保育者に「Iちゃん頑張れー」と応援してもらいながら何度も挑戦していくうちに、ついに片足が縄を超える瞬間が訪れた。何が起こったか初めは分からない様子のI児であったが、5歳児にも「やったね！」と褒めてもらって、「もう一回やってみる」と嬉しそうにまた跳び始めた。

《考察》

初めてのする活動には不安があり、取り組むことに消極的であったI児は、保育者と一緒に遊ぶことが多かったが、友達や異年齢児と関わることの楽しさや、初めての遊びにも「おもしろそう」「やってみたい」という思いをもってほしいという願いがあった。そこで、縄を使った遊びの楽しさを感じ、少しずつ慣れ親しんでいけるような活動を取り入れたり、4、5歳児が同じ時期に縄跳びを取り入れ、近すぎず遠すぎない程良い距離間で活動できるように環境を設定したことが、5歳児の姿に刺激を受けながら、初めてで不安なことでも真似してやってみようとする姿に表れた。

また、跳び方を教えたり、応援してくれたりする5歳児の姿が4歳児にとって身近なモデルとなり、憧れの気持ちや繰り返し挑戦してみようとする姿にもつながっていったと思われる。今後も、遊びや生活の中で自然な異年齢での関わりがもてるように、職員間で連携しながら子ども達と一緒に進めていきたいと思う。

【5歳児】 11月 中旬 「1年生と一緒に遊ぼう」

小学校に興味や関心をもち、就学を楽しみにすることができるよう、1年生と学期に1回程度交流する機会をつくっている。2学期の交流は、小学校の体育館で体操教室の先生と一緒に体を動かして遊ぶ内容であった。体を動かして遊ぶことが大好きで、1年生や体操教室の先生と遊ぶことをとても楽しみにしていた5歳児の子ども達は、「小学校でどんな遊びをするのだろう」と期待しながら小学校に向かう姿があった。

体操教室では、1年生と2人組になって“じゃんけんトンネル”や“引っ張り合い”“ボール遊び”などの触れ合い遊びを楽しんだ。2人組になる場面では自分から1年生を誘うことが少し恥ずかしそうな子どももいたが、勇気を出して「一緒にしよう」と自分から誘おうとしたり、1年生に「一緒にしよう」と誘ってもらうと、嬉しそうにならずいたりし、触れ合いを楽しむ姿が見られた。



また、ボールを使った遊びではドリブルを1年生と見せ合い、ドリブルが連続で何度もできる1年生の姿に「お兄ちゃんかっこいいな」と憧れの気持ちをもって目を輝かせながら見ていた。その後、体操の先生に“たまごドッジボール”を教えてもらい、簡単なルールを守りながら、1年生と対決して楽しく遊んだ。1年生と一緒に体を動かす遊びを経験し、園でも友達同士で遊ぶ中で、12月頃には3歳児や4歳児とも一緒に楽しんで体を動かす姿がたくさん見られるようになった。

《考察》

様々な人との関わりの中で、お互いに刺激し合って遊んだり、小学校をより身近に感じたりできるようにしたいという思いがあり、小学1年生の先生とも内容を立案しながら交流会を計画している。1年生や体操教室の先生と一緒に触れ合ったり、関わったりする中で、一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを感じることができた。

その中でも、1年生との交流の回数を重ねる毎にお兄さんやお姉さんに親しみの気持ちを感じたり、憧れたりする姿がたくさん見られるようになった。また、1年生の姿に刺激を受けて「自分も」と更なる意欲を感じたり、自分達の園での遊びに取り入れたりする姿につながった。交流会で優しく声をかけてもらった経験を園では4歳児、3歳児などの異年齢の友達との関わりの中で、「今度は自分達が優しく声をかけてあげたい」と思いやりの気持ちをもつきっかけになった。

5. 研究の成果

- 保育者は一緒に遊んだり、子どもに寄り添いながらじっくりと見守ったりすることで、仕草や表情、態度から思いや興味、関心を汲み取り、想像し、理解していくことが大切である。その為にも、子どもが安心して自分を表現できるような場と、保育者との信頼関係は不可欠である。その信頼関係と安心感という礎のもと、子ども達は安心して様々な“もの・こと・ひと”に自ら関わることができ、自ら“やってみよう”と主体的に活動する姿につながった。
- 意図的に遊ぶ場の環境を整えたり、保育者や、同年齢児、異年齢児や小学生等と遊ぶ機会を計画的にもったりする事で、人と関わることで得られる楽しさや、新たな気付き、異年齢児に対する憧れの気持ちや、年少児に対する思いやりの気持ちなどを実体験として味わうことができた。また、繰り返し楽しめる環境や、その経験の積み重ねが自信や、心の糧となり、心と体が動かして主体的に遊ぼうとする姿に表れた。

6. 今後の課題

- 子ども達が様々な経験を重ねていく中で、保育者も一緒に遊びを楽しみながら、保育者自身の感性を磨き子ども理解を深めていくことが必要である。
- 子ども一人一人の気持ちや思いを聴くだけでなく、言葉にならない気持ちにも寄り添いながら、子どもが安心してより自分を表現することができるように、環境を工夫し、引き続き子どもとの信頼関係を築いていきたい。